
雨

鈴蹴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨

【Nコード】

N1704E

【作者名】

鈴蹴

【あらすじ】

少女の恋。それは少女にとって、世界の全て。それを失ったとき、少女の心もまた、壊れてしまう。だけど、大切なことは、その先にあった……。何気ない景色が落とす気持ちの変化を、ある大好きな歌を参考にしながら短編に詰めてみました。

「他に、好きな人が出来たんだ。」

ケロッとした表情で、彼が言う。
目の前が、真っ暗になった。

「だから、君とはもう、これで終わり。」

彼が続ける。

あたしは何も言わず、ただ立ち尽くしていた。

「じゃあね。」

彼が背を向ける。

泣き言、怒り……言いたいことはたくさんあるのに、言葉が出てこない。

あたしは彼の背中を、ただ黙って見つめていた。不思議と、涙は出なかった。

太陽が、嫌味なほど眩しく照り付けていた。

下校中の子供たちが、追いかけてっこをしながらあたしの脇を走り抜けていった。

その子供たちの笑い声が、やけに煩わしかった。

とぼとぼと肩を落として家に向かう道のり。いつもは彼と歩いていた道。

彼といるときはあつという間に家に着いてしまつのに、一人で歩くとやけに長く感じる。

歩きながら、あたしは彼とのことばかり思い出していた。
去年、同じクラスになって、仲良くなって、付き合うようになった…。

二人で笑いながら叫んだ遊園地のジェットコースター。
学校からの帰り道、毎日のように彼と立ち寄ったカフェ。
傘を忘れたあたしが濡れないように、隣で傘を傾けて相合傘をしてくれたこの帰り道…。

あたしは再び空を見上げる。

太陽が、嫌味なほど眩しくあたしの目を焦がした。

「おかえりなさい。」

家に帰ると、お母さんがあたしに声をかける。

「ただいま」を言う気力もなく、あたしは無言のまま靴を脱いで自分の部屋へ向かう。

部屋に戻ったあたしは、大きな溜息をついた。

いつもなら、『ただいま』ってメールを彼に打つの…。

無性に寂しくなった。

姿見の前に立ち、

机の上のペン立てにペンに交じって立てられたカッターナイフを手にする。

カチカチカチ…と音を立てながら、カッターナイフの刃を伸ばす。そして、左手の手首を姿見に映るように正面に向け、右手に持ったカッターナイフを…。

ゆっくりと、左手の手首に押し当てた。

すうっと、カッターナイフを引く。

左手の手首に線が入る。少し遅れて、血が流れ出す。

まだ、足りない。

あたしは何度も、同じように左手の手首に何度もカッターナイフを走らせる。

何度も、何度もカッターナイフを走らせた左手の手首から流れ出す血が、

あたしの左腕を伝わって、肘からばたばたと部屋のカーペットの上に落ちる。

その景色を境に、あたしの記憶は途切れた。

……。

目を覚ますと、あたしは病院のベッドの上に居た。

左手の手首には、ぐるぐると巻かれた包帯。

…あたしはきつと、あのまま気絶してしまったのだろう。

ふと、窓の外を見ると、外は雨。

…頬が雨に濡れてしまえば、雨水に紛れて涙を流すことが出来た

のに。

木々に雨粒が降り注げば、木々の葉が鳴らす雨音に紛れて大声で泣くことが出来たのに。

そんなことをぼんやりと考えていた。

昨日が晴れていたことを悔やむのではなく、今日が雨であったことをあたしは悔やんだ。

…思いっきり泣いたら、少しは楽になれたのかな。

窓の外、病院の前の道には、傘を差して歩く人々の姿。

あたしは、その傘の列を眺めながら、彼が好きだった歌を口ずさんでいた。

「…沙希？」

不意に、声が聞こえた。

口ずさんでいた歌を止めて振り返ると、お母さんが立っていた。

「良かった…。」

そう言つと、お母さんはその場に膝をつき、ベッドの脇に頭をついて泣き崩れた。

あたしは、すぐそこにあるお母さんの頭を、そおつと撫でてあげた。

…生きていて良かった。そう思った。

今思つと、バカなことをしたなあつて…。

あたしの傷は、血の量の割にはたいしたことがなかったらしく、

意識を取り戻したあといくつかの検査を受けて、次の日には退院することになった。

退院したあたしの手を、お母さんが握って歩き出す。
外は、まだ少し雨の跡が残る、きらきらした晴れの日。

お母さんに手を引かれて歩く道。

…彼と一緒に歩いた帰り道と、同じ道。

見慣れたはずの景色は、まだ残る雨の名残のせいかどうか分からないけど、

ちよつとだけ、違って見えた。

きらきらと、木々が、アスファルトに出来た水溜りが、光を放つ。
そして、前を歩くお母さんの背中。見ていると、なんだかとても安心できた。

こんなに綺麗な景色があったのに、どうしてあたしは気付かなかったのだろう。

こんなに綺麗な景色も知らないで、どうしてあたしはあんなことをしたのだろう。

「…ごめんね。」

あたしは、お母さんの背中に小さく呟いた。
心配かけて、ごめんなさい。バカなことをして、ごめんなさい…。

「ん？なあに？」

お母さんが、振り返ってあたしの顔を見る。
そして、目が合うと、ちよつとだけ照れ臭かった。

「うっん、なんでもない。」

「なによー、教えなさいよ。」

そう言っ て笑っ お母さんに、あたしはようやく笑顔を向けた。

あたしとお母さんを追い抜いて、下校途中の子供たちが走っ てゆく。

その笑い声が、とても心地よく感じられた。

空を見上げると、太陽さえも笑っ ているように見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1704e/>

雨

2010年10月8日22時09分発行